東洋文庫

會津八一全集

第六卷

會津八一全集 第六卷
定價二〇〇〇圓
昭和四十三年十二月二十日初版
昭和五十二年六月十日四版
著作權者 會津蘭子
發行者 高梨茂
印刷者 山元正宣
發行所 中央公論社
東京都中央區京橋二—一
電話（五六一）五九二一
振替東京二—三四

編輯者例言

一、この第六巻『隨筆』は、秋艸道人會津八一の隨筆と目せられるものの大部分を收載した。ここにあつめえた諸篇は、道人の生前、雜誌・新聞紙、その他に公表せられたものである。これ以外に、若干の初期文章がのこされてゐるが、それは一括して第七巻『日記・雜纂』の巻に收錄することとした。

一、『渾齋隨筆』は、道人晩年の手訂本が、印行直前の姿で殘されてゐるので、これを底本とし、原序と未發表の「第四版に臨みて」なる新らしい序文をともに、そのままのかたちで第一部の末尾に收載した。これは改訂をもくろまれた道人の遺志を尊重したからにほかならない。

一、この巻の他の部分は、時期的にいつて、大正十三年十月以降、太平洋戰爭の終末にいたる間に、執筆、公表せられたものと、それ以後、逝去にいたる間、つまり道人の新潟退隱中のものとの二つのグループにわかれる。前者には、第一部の『渾齋隨筆』に採錄せられた諸篇をふくむし、後者は、終戰後、道人が關係せられた『夕刊ニイガタ』、『新潟日報』のために執筆せられたものが、もつとも多量をしめてゐる。したがつてこの巻は、便宜上、年代的にはほぼ三つの部分にわけることができる。

一、『渾齋隨筆』以外の、本卷收載の隨筆には、多少とも學藝評論の性質をもつものがあるが、道人の遺文の、本來の性格からいつて、隨筆と評論的なものを截然とわけがたいためもあつて、あへてこの卷に收錄することとした。なほ、談話の形式で公表せられたものも二三あるが、この卷にふさはしいものは、併載することにした。

一、本卷收錄の諸篇は、第一部をなす『渾齋隨筆』以外は、公表の年次の順にしたがつた。また公表時の書名と、その刊行年月を、それぞれ篇首に附記した。

一、戰後、新聞・雜誌に印刷せられる場合、ほとんどが、新假名法が用ゐられてゐる現狀にあつて、道人が慣用せられた舊假名法は、當然改められて公表された。編輯者は討議の結果、本全集の假名遣ひを統一する必要と、道人の慣習を尊重するため、これらの諸篇を、すべて執筆時の舊假名法に復元した。

一、この卷に收錄した『渾齋隨筆』中の引用短歌區切法は、他の部分の區切法とかなりの相違がある。この區切法は、道人晩年の不斷の關心と試行に基づくものであつて他の部分とにはかに統一を許さない。したがつて、すべての短歌の區切法は、それぞれの底本、乃至自筆校訂本を嚴格に踏襲することとした。

一、他の事項は、卷末の「編輯後記」にゆづる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

編輯者例言

第一部　渾齋隨筆

觀音の瓔珞　一

唐招提寺の圓柱　六

西大寺の邪鬼　一三

毗樓博叉　一九

鹿の歌二首　二三

乘馬靴　二七

懷古の態度　三三

奈良の鹿　四一
衣掛柳　四八
歌材の佛像　五四
斑鳩　六一
小鳥飼　七七
歌の言葉　八八
譯詩小見　九六
推敲　一一三
中村彝君と私　一二五
自作小註　一三三
序　一七四
第四版に臨みて　一七七

第二部

奈良美術に就て　一八一
實物尊重の學風　一八四
帝展の日本畫を觀て　一八八
山口剛君のこと　一九八
槻の木　二〇四
支那の明器　二〇七
二人侍　二一二
奇　遇　二一四
新博物館を觀て　二一六
大同、龍門、天龍山寫眞拓本展覽會　二二一
一片の石　二二四

書道界に對する疑問　二三〇
東大寺斷想　二三五

第三部

公園の石碑　二四一
逍遙十三回忌　二四六
友人吉野秀雄　二五一
原宏平大人　二五六
麻青居士　二六一
綜合大學を迎へて　二六九
大學とその總長　二七二
綜合大學の圖書　二七六

文化の日　二八〇
藝術の道　二八二
秋の空　二八八
新年の曙光　二九一
焼失した法隆寺壁畫　二九六
法隆寺金堂の焼損について　二九九
壁畫問題の責任　三〇一
近代美術展　三〇七
朝河貫一と私　三一一
私の歌碑　三一六
現代の書道　三二三
平泉行き　三三六
相馬御風のこと　三四六

古建築の火災　三五一
新潟だより　三五四
陶磁器の鑑賞　三五九
名譽市民について　三六三
東京の一週間　三六九
文化の自覺　三七五
少年少女におくる言葉　三八一
文化の反省　三八三
リーチさん　三八八
街上の文化　三九一
相馬黑光といふ人　三九五
編輯後記

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一部　渾齋隨筆

觀音の瓔珞

此の春、創元社から出した私の歌集『鹿鳴集』の中に

くわんおん　の　しろき　ひたひ　に　やうらく　の　かげ　うごかして
かぜ　わたる　みゆ

といふのがある。明治四十一年の八月、私が初めて、奈良へ古美術行脚に出かけた折に出來た二十首ばかりの中のもので、場所は、たしか富郷村の法輪寺であつたやうに記憶して居る。やうに記憶してなどいふと、少しぼんやりして來るが、實際私は、話をするにも、物を書くにも、確かな手控などを持たないことが多いから、折々こんな物のいひ方をしなければならなくなるのであるが、大正十三年に、春陽堂から出した赤い表紙の『南京新唱』には、この記憶のままに「法輪寺にて」と詞書を附けておいた。ところが、あの本を出したあとで、ふと氣がついて見ると、あの寺の講堂の本尊になつて居る、一丈あまりもある藤原時代の十一面觀音は、額はなるほど白いが、その上の瓔珞を私は思ひ出せない。その後物のついでに寺へ行つて、開扉を願つて、戸帳を上げて貰つて、よくよく拜見したが、やはり瓔珞は見えなかつた。で、この春、歌集の原稿を整理する時に、印刷の間際になつてから、いくらかの無理さへも忍びながら斷然「奈良博物館にて」

といふ一群の中へ、あの歌を組み變へさせてしまつた。それは、あの奈良博物館の、とりつきの大廣間の、正面の大ケイスには、古い頃から此の寺が出陳して居る一體の菩薩像があつて、それをば、館では、寺傳に從つて虛空藏菩薩として居るが、私などの目には、觀音にした方が、むしろ自然に見えるから、私の歌の觀音が、法輪寺のものであつて、講堂のでないとすれば、まさしくこちらに違ひないと、かう考へ直したのであつた。あの博物館の同じケイスの中には、時代なり、姿勢なり、持物なり、此像とよく似てゐる、私どもの所謂百濟觀音も、永いこと、しかも此の法輪寺の菩薩と並んで立つて居られたものだが、持ち主の法隆寺の云ひ傳へによつて、これも一と頃は、虛空藏にされて居たために、友人の濱田靑陵君などは、最初はそれに從つて、物に書いたりして居たが、後には觀音にして、自分の隨筆集の題號にまでしたものだ。とにかく、こんな因緣もあるので、法輪寺の虛空藏を、私も、何の苦もなく觀音にして、此の歌を割り當ててしまつたのであらう。

今年十月、私はまた奈良へ行つた。そして法輪寺へも立ち寄つて、現住の井上さんにも初對面をした。其時井上さんから、先づ此の歌の話が出た。その御說によると、あの歌は、何うしても、やはり講堂の觀音に違ひないといふ。そこで私は、早速瓔珞のことをいひ出して見たが、あちらでは、まるで待つてでも居たやうに、なるほどその瓔珞は、今こそ無くはなつて居るが、寺でそれを取り除いたのが、明治四十二年だから、歌の出來た頃には、まだ確に附いて居た筈だと、一

枚の古い寫眞を取り出して見せられた。それを見ると、なるほどこれは、後世の不器用な添へ物で、當然取り除けなければならぬ代物ではあつたが、とにかく、こんな物が在るには在つたのだ。いよいよこの像だとすれば、私は此の瓔珞をば、詠んだのであらう。私は今さら、いろいろな意味で、此の寫眞には驚かされた。しかし、よく見るに、此の瓔珞たるや、觀音の御額の上に、かぶさるやうに、ほどよく垂れて居るといふのでもないし、又なかなかたやすく、風やなどで搖れるやうなものでもなかつた。これをば、私の心の中に、忽ち一陣の風を捲き起して、それを動かしたのかもしれぬ。さうだとすれば、むしろこれにも驚かされる。

むかし、ある人は、鎌倉の長谷にある、あの定印（じやういん）の大佛をみて、お釋迦様は美男子だといふ歌を詠み、あとでまた、阿彌陀さんに詠み直されたとか聞いて居る。釋迦でも、彌陀でも、如來の顏は似たものであるし、『吾妻鏡』の筆者なども、まちがつてゐるくらゐだから、其時さう見えたのならば、またそれもよからう。私の方は、觀音の白い額の上に、動きさうも無い瓔珞の影を動かして、其所に微風の吹きわたるのを見たことになる。これはまさに何とか大に說の起るべきところかも知れぬが、私は、ともかくもありのまゝを此所に記しておく。

（昭和十五年十二月十五日稿）

唐招提寺の圓柱

おほてら　の　まろき　はしら　の　つきかげ　を　つち　に　ふみつつ　もの　を　こそ　おもへ

これは『鹿鳴集』では「唐招提寺にて」と詞書を附けておいた。自分としても割合に好きな方であり、福島縣の天野秀延君が、伊太利風の作曲をしてくれた三首の中にもはひつて居るし、いくらかの好みを寄せる人は、ほかにも折々見かけることがある。中にもむかし唐招提寺に住んで居た或る若い坊さんなどは、一應この歌を褒めてくれた後、いつもきまつて御寺の景觀の自慢になつたものだ。「御歌もよろしいのでせうが、私の寺で詠まれたものが、ことにづぬけて結構におもはれます。」つまり御寺の良さに曳き上げて貰つた歌だと云ふことにもなる。

ところが先夜、ある劇場の廊下で、ひさびさに、一人の青年美術家に出會つた。今は舞臺裝置などに凝つて居るが、ずつと前に、私について行つて、初めて奈良を見た人である。私が歸りがけに、「のこり　なく　てら　ゆきめぐれ　かぜ　ふきて　ふるき　みやこ　は　さむく　ありとも」といふ歌を詠んで與へて居るのは、この人である。廊下の立噺で、この人の云ふところによると、この「圓き柱」といふ歌は、決して唐招提寺ではなく、實は法隆寺であつた。あの日は、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com